

# おわりに ～天明浅間山噴火の教訓～

## 第1節 火山噴火に伴う災害

天明浅間山噴火は、関東周辺で起きた大規模なプリニー式噴火の事例として、富士山宝永噴火と並んで重要であり、浅間山周辺の降下物等から判断すると、天明期特有の特殊な要因による部分もあるものの、将来的にもやや様相を異にするとしても起こりうるケースであると考えられる。

### 1 降下火砕物

天明の噴火は夏季に発生したが、将来、もし風速の大きい冬季に噴火が起こるとすると、降下物がより遠方まで到達する恐れがある。

### 2 鎌原火砕流／岩屑なだれと泥流被害

鎌原火砕流／岩屑なだれについては、前に述べたとおり世界にも例のない火山学的にも極めて特異なものであり、将来同様の現象が発生する確率は極めて低いと考えられるものの、一旦発生すれば大きな被害を伴うと予想されることと、泥流被害については、ほかにも次に挙げるような要因により吾妻川流域が天明期と類似した被害を受ける可能性があることに留意すべきである。

#### (1) ケース1 水蒸気爆発などによる融雪型火山泥流

浅間山では着雪期の噴火などで融雪型火山泥流が発生する可能性がある。吾妻川まで到達するか否かは泥流の量や発生地点の標高などに左右される。また、天明期のような巨大岩塊を含むことは予想しにくいため、吾妻川を流下したとしても、その際の流れの性質は異なる可能性が高い。

#### (2) ケース2 岩屑なだれや火砕流が水系に突入して発生する火山泥流

岩屑なだれが吾妻川まで到達した場合、天明期のような現象が起こり得る。また、天仁（1108年）噴火の追分火砕流や1～2万年前の時代に頻発した大規模な火砕流を想定すると、火砕流が吾妻川に流入して天明期のような現象が起こる可能性がある。

## 第2節 復興対策

### 1 被災地全域に目配りした統一的復興策の必要性

幕府は幕府領のみならず、全国政権の責務として大名・旗本領を含む復興対策を実施した。しかしながら、幕府は直轄領に対しては耕地整理費まで支出したのに対し、大名領については認めず、幕府領との共通インフラである用水路の復旧しか支出しないという措置をとるなど復興の重点は幕府領に置かれた。これに対して大名・旗本領もそれぞれ自らの領地の復興を進めたが、小さな藩や旗本の救援策が不十分であったため、大名・旗本領の村々にとっては不満も強かった。

また、幕領私領の共通インフラである河川の復旧は幕府で行ったものの、その形態が被災地外の大名による、幕府に対する封建的義務負担としての「お手伝い普請」であったことから、普請の経験や技術向上の成果の共有、竣工後の管理の観点に欠ける事業施行となり、工事完了にもかかわらず再修理を必要とするものもあった。

また、噴火による米穀輸送ルートへの遮断をきっかけに、上野・信濃の米商人買占め・売り惜しみが起こり、一方で信濃国の諸大名が米穀領外移出禁止措置をとったため、上野国で一揆が起こることとなった。この時代、既に広域にわたる商品流通ルートが成立していたにもかかわらず、災害の広域的な経済的影響への対策が欠けていたためであろう。

これらは被災地全域に目配りした統一的復興策の欠陥により、種々の混乱が起こったことを示している。

### 2 地域主導の再建と自助、共助、公助の連携の必要性

これに対して、村のレベルになると、家ごとに経営再建の歩みに差があり、経営破たんする百姓が生ずる一方、大多数の村では復興を個々の家任せにせず、村全体として復興を進めようという姿勢がみられた。村が村人の生産と生活を守るために重要な役割を果たし、また、各地の有力者が村や地域のために私財を提供して復興に尽力した。行政当局と地域リーダーと一般被災者が役割分担しつつ一致協力することによって救援と復興を進めること、すなわち、自助、共助、公助の連携が重要であり、今日にも通ずる教訓であると考えられる。

## 第3節 被災の記憶の継承

### 1 各種記録メディアの重要性

絵図は被災の記憶を伝え、その全体像のイメージをよみがえらせてくれる。各地に残る石造物は、被災の記憶を伝えるものもあれば、復興の功績を伝えるもの（報恩碑）もある。当時の人々が可能な限りの手段で残した記録が今日の我々に教訓を残してくれることとなった。

今日災害の記憶は様々な媒体により継承されることとなった。文書、映像、また、公式記録や体験者の談話など、質量ともに多様な災害記録が残されるようになった。これらの重要性、必要性は今後とも変わらないであろう。

### 2 記念行事の挙行と災害教訓の継承

石造物の中には、その場所で毎年命日に供養祭が行われるものもあり、供養祭は、災害の記憶を呼び起こすとともに、救済者への謝意と先人の美挙をも伝え、災害を再認識し新たな意味を見出す契機ともなるものである。このような供養祭は、災害教訓の継承という意味では貴重かつ重要な例であり、形態は様々であっても、記念行事、イベントなどの機会を設けて災害の記憶と教訓を共有することは今日的にも重要な意義を有している。

しかしながら、意味づけを行う価値観は時代に応じて変化し、行事の担い手も移り変わる。新たに生み出される記憶には、災害の忘却や誤解も含まれ得るのである。真に教訓がその力を発揮するときまで、その時代に最も役立つ形で伝えていくことが必要とされる場所である。